妖怪談
四十七海上
へ13
3754
66

門 へ13
號 3754
卷 66

彼編を摘多く毎編ごとに新假字おほよそ百餘字ありいねえあるど新假字違ひハ一字の謬ハ義を失ふ此書ハ其一字の謬ハ義を

柳亭種彦

序。

そのひめのとある。非命なるをいふのとを誤りて同序なり。

四十五編の終半ばにそのひめのとある。

白尾の齢の虚ゝ此齢の文字ハ。きりそめのとを脱して語路のよくなるハ筆ユの粗忽なりこゝもの類

けど秋作の女房が姫ゆゑハ杜撰と云べし一字の謬ハ義を

失ふ如く。その語路の口ぐるしきハ既ゐ三十六編の序にも

板元の癖往事ハ文字の改を歎きも

先我誤著を改め次ゐ筆ユ彫ユの麁漏を挙て年表の

元治二乙丑夏發販 二月 脱稿

柳亭種彦

貓解脫

賤女嗚呼魔

南無妙法蓮華經 利益衆生 御家門

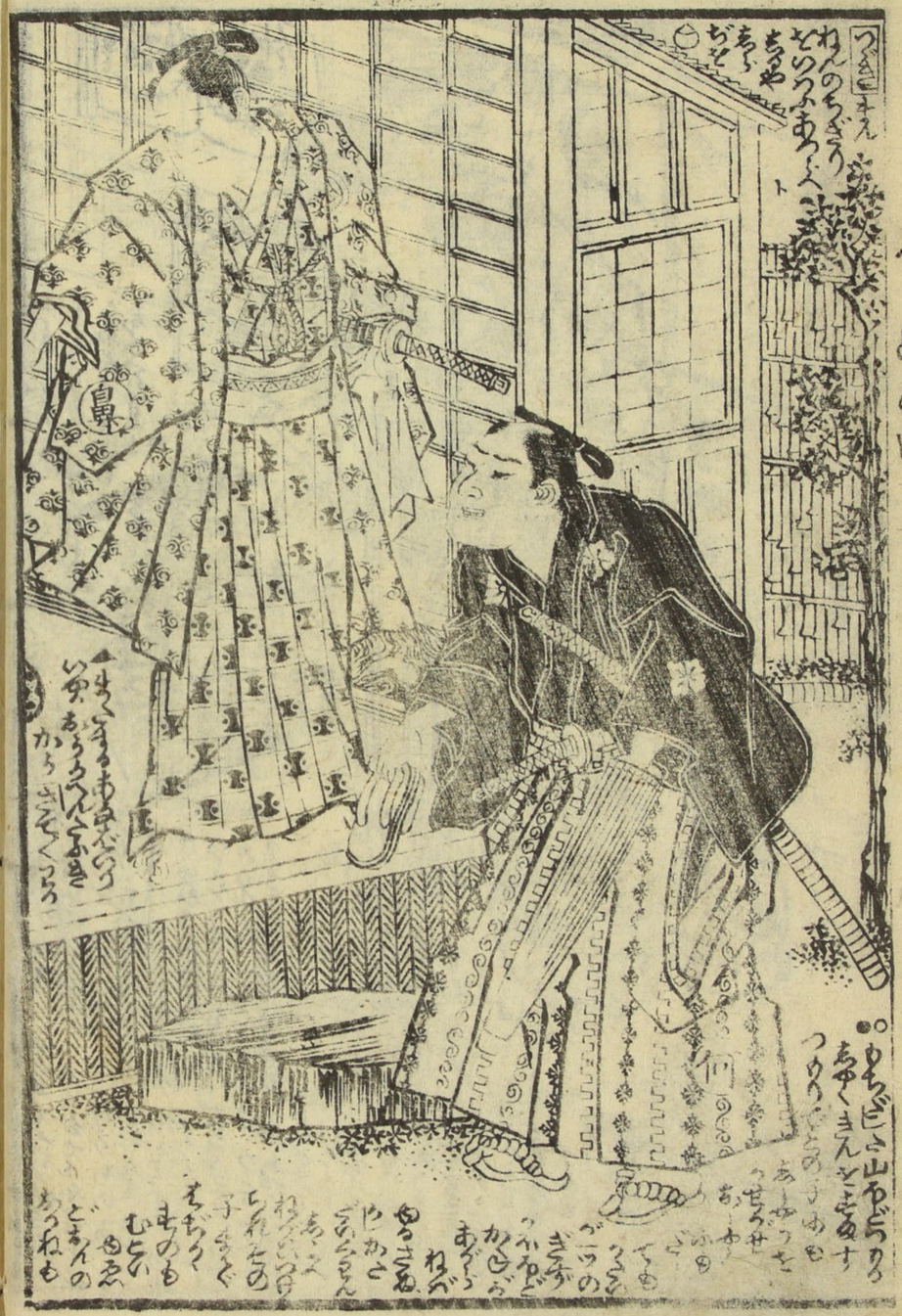
妖

明人金花奴

○そのころはうどのこうちゃあてもりのすみのうぐいすうたいのちゃうくそうろうみうたのうりそのまゝひとりさうんのまゝものきひとりけんぺのせゆきろくくてをひはなすごろあひまれどもそれどもそれもそこびむるめのみゝこれぞ一男みのこのなぐさうのまゝそこちそこそれどころんうさくぶいかてくこのむいおくまゝくさひとつのそうろうえものをあぐ色にてそこ半をとんぼびくうむしまてうりのゆふぐれのしくあり母ところへのさくあさうるものとびあそうそうくてもきうどんのまゝそこそれひきうんちやのけんぬをかんるもこのすぐまてあれきめぐうる色そゆそまゝまのせそまりいちむさくいとくとゆくまゝこちめのあれどうくうさまをどうれやこゝろ

ちくうひしいそこ半をとせうこのうくのまうふまうきくふーそまやそうそのさまそうろう大家のむすこまれとあのびあうまのもうまうらんひとりのえんぺいふうふのがーが

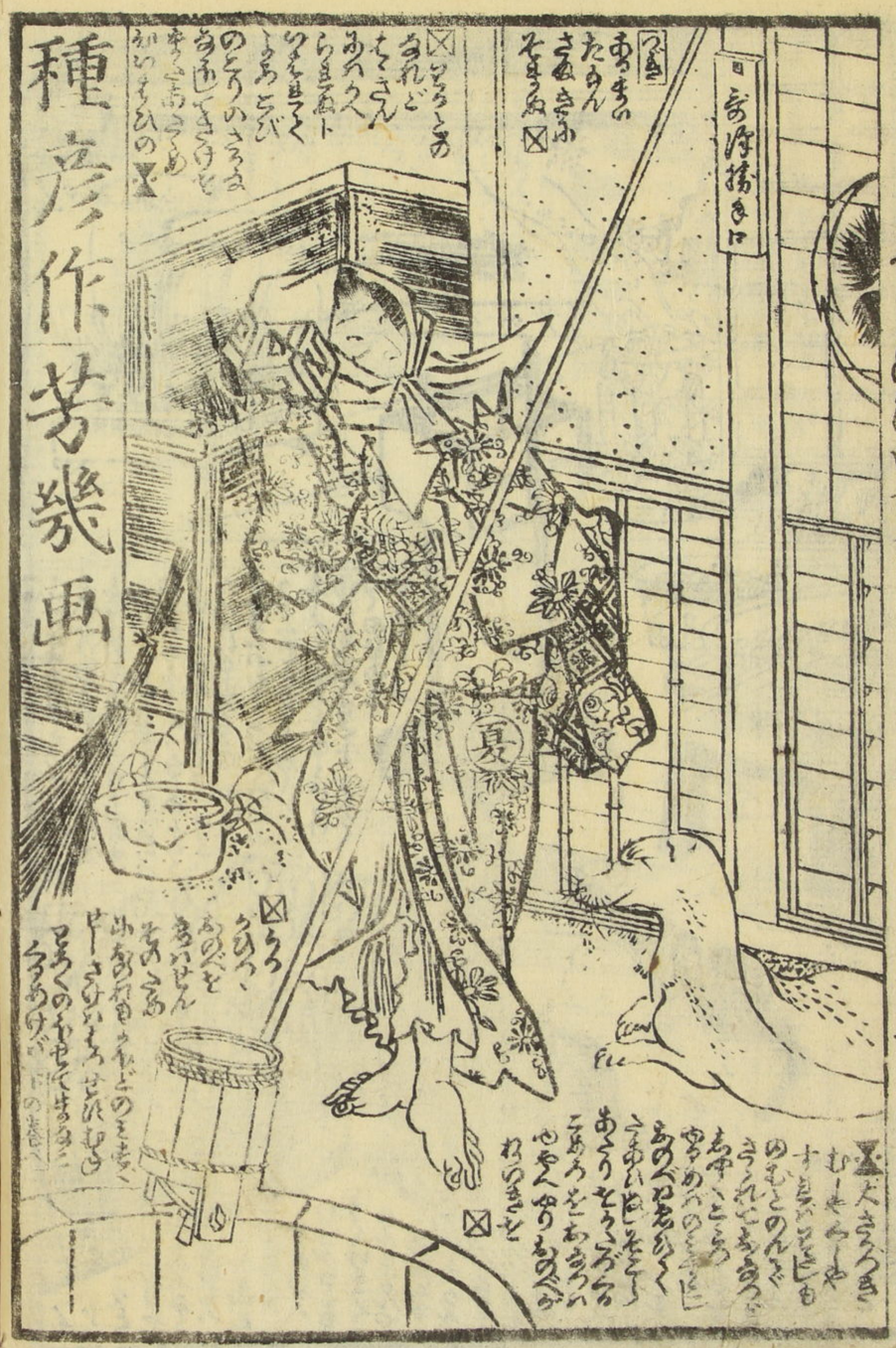
賣神社



持

野
夏

夏



兩面織花田物語 初編 上帙
假名讀八犬傳 本傳 第十輯
古今俳優似顔大全
太平記英勇傳 中編 山之巻